

宗教間対立によって運命を歪められたフランス時計産業

中世フランス・ブルボン朝の栄華の背景には、ブルボン朝初代国王アンリ4世が王令として発布した「ナントの勅令(1598年)」が大きく起因します。新教徒(ユグノー)に与えられた“信仰の自由”は、40年に及んだ宗教戦争(ユグノー戦争)を終結させました。その狙いは、金融・商業・工業分野の大きな担い手であったユグノーを保護する事にあり、経済安定と繁栄を促すことだったのです。

そして時計職人の多くはユグノーであったため、フランスで時計産業が大きく花開くことになりました。その後ルイ14世が絶対王政を築き「ナントの勅令の廃止(1685年)」をしたことで宗教間争いが再発、ユグノーは虐殺を逃れるため、フランスから国外へ逃亡します。

時計文化・市場は長期に渡り栄華を誇るフランスが中心でしたが、その担い手であった多くのユグノー達はジュラ地方(現在のフランス・スイス国境付近)に逃れたため、その後、時計製造の中心はフランスからジュラ地方へ移行していきました。



1685年10月18日、ルイ14世はナントの勅令を廃止。これにより宗教戦争が勃発し、ユグノー達は迫害を恐れ国外へ逃亡します。

逃亡者には時計師が多く含まれており、彼らは主にスイス方面のジュラ地方へと逃れました。

知られざるフランス時計産業史



フランスとスイスの国境にまたがるジュラ地方に逃れたユグノーは、身につけた時計製造技術を生かし、この地に産業を興しました。

モルソーやブザンソンから東に向かってフランス国境を越え、約25kmほどの場所にあるスイスのラ・ショー・ド・フォンやル・ロックルといった場所も同様だったのです。

時を経て現代になり1970年代、クォーツ時計の台頭によりフランスとスイスの時計産業は壊滅的な打撃を受け、多くの時計メーカーが衰退していきました。国として大規模な輸出ビジネスに成長していたスイス時計産業は、国が多大な支援をし再生を果たしましたが、フランス時計産業は国としての援助策は無くほぼ消滅したとされています。

しかし、モルソーやブザンソンにある歴史的で優秀な時計学校や時計博物館は産業とは別であり文化として残ります。現在もこの時計学校で技術を身につけた人々は、フランスから毎日国境を越えてスイスで働いています。

彼らは“フロンタリエ”と呼ばれ、スイス時計製造従事者のおよそ70%がそのフロンタリエであり現代社会現象にもなっています。

現代に甦るフレンチ・マニュファクチュール

2007年から始まった「カリブル ロワイヤル」の開発にはフランス政府による資金的支援もなされ、最新鋭の機械工作機器が設置された自社の研究室には優秀な人材が招集されました。歴史的な時計の町モルソーに本社を構えるわずか20数名の小さなペキニエ社は、フランス時計産業の栄光を再び取り戻し、フランス唯一のマニュファクチュール ウォッチメーカーとしてフランスの伝統と文化を継承しています。



モルソーにあるペキニエ本社



自然に調和した清潔感ある工房



1/100,000秒まで計測可能な(可変結合機)